

バロック音楽における象徴音形・象徴数

マリー＝クレール・アランのCDによるJ.S.バッハ：オルガン作品全集 (R30E-501～17) の解説の中に、以下の興味深い部分がありますのでご紹介します。著者はアラン自身、植田義子さんの対訳です。

* [] 内の注と譜例は萩野の追記。

感情、概念を表わす音形、音進行の定式化について

個々に問題にされるのは、“示導動機(Leitmotiv)”という用語が用いられるようになる以前に、すでにこの考え方の基礎となっていた象徴的な音形、音進行などの、本当の意味での定式化された使用についてである。シュヴァイツァーはすでにこれらについて研究していたが、ズメントとテリーは、それをきわめ、明確な形でそれらを浮き彫りにした。これは、音楽上のテキストの中に隠された、表現手段としての言語のようなものである。これは実際、あまりに巧みに隠されていたので、2世紀半もの間、秘密のヴェールに包まれたままであった。

これは、コラールに基づく作品において、言葉の意味や諸概念を強調するために用いられているが、“表現内容の定式化”のこの方法は、コラール作品ばかりでなく、いわゆる世俗的な作品といわれている前奏曲、トッカータ、フーガなどの多くの作品の中にも見出だされる。

<オルゲル・ビュヒライン>の各コラールの歌詞に光をあて、いくつかのカンタータとも比較し、<オルゲル・ビュヒライン>を徹底的に研究する事によって、隠されたこの言語を知るための手がかりとしての辞書ともいえるべき、一連の定式化の集積が得られる。(中略)以下にその“表現内容の定式化”の実例をいくつか挙げておく。

順次進行での下行音階：

受肉によるキリストのこの世への降誕、又は神によって叶えられた祈り、神の慈悲。

順次進行での上行音階：

祈り、天にむかっての願い。

この2つの音形の組み合わせ：

天による受容、神によって叶えられた祈り。

平行六度(又は三度)での順次進行：

神の御意と人間の願いの一致、又は、父なる神の御意へのキリストの服従。

跳躍での下行(主に5度かオクターヴ)：

受肉によるキリストのこの世への降誕。

増音程、減音程での跳躍下行：

墜落、罪、墮落。特定の感情概念を表すものとしては、苦悩には、ほとんどの場合イ音から嬰二音が使用される。嬰二音は変ホ音に調律されるという調律上の理由から、大変耳障りな音程となる。又、死に対してはホ音から嬰イ音への跳躍が用いられる。これは、さらに耳障りな音程である。

跳躍での上行(主に5度かオクターヴ)：

復活、栄光。

最初と最後の音が同一音である、近接する4音の組み合わせによる音形：

4つの分枝をもつ十字架。

[譜例 1] ミサ曲口短調BWV232より"et expecto..."ヴィオラ第87 - 89小節



アルペッジョ：

聖霊。

韻律上の長短短格（ダクティル）のリズム型：

喜び、希望。喜びの概念は、しばしばトリルを伴う。以下の例は8分音符1個と16分音符2個だが、音長が2：1：1なら他の組み合わせでも良い。

[譜例 2] マタイ受難曲BWV244より第9曲福音史家独唱第1 - 2小節



スラーがつけられた下降音型の反復 [主にスラーのない部分が同じ音程]：

受容された苦悩、又は引き受けられた重荷。

[譜例 3] マタイ受難曲BWV244より第27曲オーボエ I 第1 - 4小節



シンコペーションのリズム：

絶望的な苦悩。

下降の半音階進行：

人間の苦悩、キリストの受難。

同一音の反復：

神のおきて、又は仮借なき必然性。

フランス風序曲：

喜ばしい威厳、行進、呼吸。

数による象徴について

この非常に重大な問題について、バッハの作品を詳細に検討して論じるためには、多くの紙面が必要である。この問題については、各曲の分析の際に、又ふれる事にする。ここでは、最も重要な数を取りあげ、それらの数が伝統的に何を象徴しているかについてだけふれておく。

3=聖なる三角形：

イシス - オリシス - ホルス (古代エジプトの女神、その夫の神、2人の間に生まれた子の名前、宇宙の象徴として古代より考えられている - 訳注)、聖三位一体：父 - 子 - 聖霊。3つのキリエは3回となえられる。

4=大地：

東西南北の4方位。空気、火、土、水、の宇宙を構成する4大要素。地面に打ち込まれた4つの分枝を持つ十字架。

5=人間：

キリストの負った5つの傷。

6=2×3：

完全という事の第一の表象。トリオによる6曲のソナタ、6曲のブランデンブルク協奏曲、6曲の組曲、6曲のパルティータ等。

7=完成を表す数字：

全体。天地創造。1週間を構成する7日。伝統的音階の7音。

9=3×3：

キリエ。父なる神のもとに立ち帰る以前の、父なる神から分離した子なるキリスト。

10=神の掟。十戒。

12=教会、12使徒。黄道12宮、12の月、半音階の12の音、5度圏。

13=未知数。不確実。恐れ。

14=B.A.C.H. (2+1+3+8)、死と復活：

オシリスの体の14の部分 (弟にばらばらにされて殺されたオシリスが、妹で妻のイシスの手でつなぎ合わされ、ミイラとされ復活した。オシリスは死と復活の神 - 訳注)。

21=3×7、又は12+9 (教会 + 三位一体)：

12の反対。神聖なる完全。教理問答コラールの21の編曲 (クラヴィア練習曲集第3巻)。パッサカーリアでのテーマの提示24回 [バッハのオルガン作品 (BWV582)、21回の間違いであることは確実]。

41=J.S. B.A.C.H. (9+18+2+1+3+8)：これは14の反対。

158=J.O.H.A.N.N. S.E.B.A.S.T.I.A.N. B.A.C.H.(1+5+8=14であることに注目)。

2003.4.14・萩野